

鉢物花き生産と

コーティング肥料の利用

岐阜県中山間地農業試験場

住井正康

近年の鉢物花き生産量の増加は著しいものがあり、シクラメン、ペゴニア等の草花、球根類、アザレア、ハイドランジャー等の花木類、その他ラン類、山草類と、種類も多様化している。また、栽培面では、植物生育調節剤の利用、各種開花調節法の利用と、高度な栽培技術が必要となって来ている。

所要労力では、かん水、培養土作成、移植が多くを占めており、省力的方法が各所で研究、開発されている。しかし、施肥については、従来通りの基肥+追肥型で、施肥量、時期は経験的な勘に頼る場合が多く、労力を要する割に均質生産し難く、栽培をより難しいものになっている。

鉢花の養分吸収量と吸収割合は、種類により著しく異なるが、概して吸収量は初期に少なく、生育に伴って直線的に増加する傾向であり、吸収割合は窒素の影響が最も大きく、次いでリン酸、カリであるといわれている。

施肥の効率化と省力のための緩効性肥料の利用は、従来から考えられて来たことであり、実際に使用されているものもあるが、一般に溶出量が、土壤水分、温度、PH等に左右され易く、安定的肥効が期待できず、均質生産につながらなかった。

以下に述べる被覆複合燐硝安加里(コーティング肥料)は、濃度障害がなく、用土のPHや水分条件に、溶出量が左右されにくいので、肥料の利用率が向上し、安定した肥効を示す。また、溶出タイプを選ぶことによって、追肥の省略ができて、計画生産が可能となる。消費者にとっても、衛生的で、買入後の施肥の心配がない等、多くの特長を持っており、当地方の鉢物生産農家での使用が、急速に広まっている。

そこで、当該において各種鉢物に実際使用した種類のうち、代表的なものについて成績概要を紹介しながら、効果的使用方法について述べ、参考に供したい。

1. 草花類

リーガー・ペゴニアは、エラチオール・ペゴニアの主流をなすもので、西ドイツで育種され、その花色の鮮明さと、寿命の長いこと、栽培期間がシクラメンに比べ短く、開花調節により、周年開花が可能なので、栽培が急増している品目である。

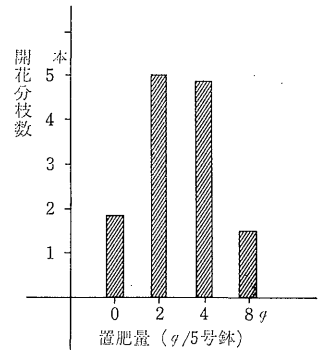
当該では、主要品種を用いて、置肥の場合のコーティング肥料140タイプの効果と、適量について検討したところ、追肥なしでは葉色うすく、生育が劣り、また8gでは葉が大きく、濃緑色となったが、栄養生長過多となり、花芽分化が遅れた。

図一1のごとく、

良品の条件である開花分枝数から見ても、4gで開花分枝数が多く、花径も大きくなり、生育も順調であった。

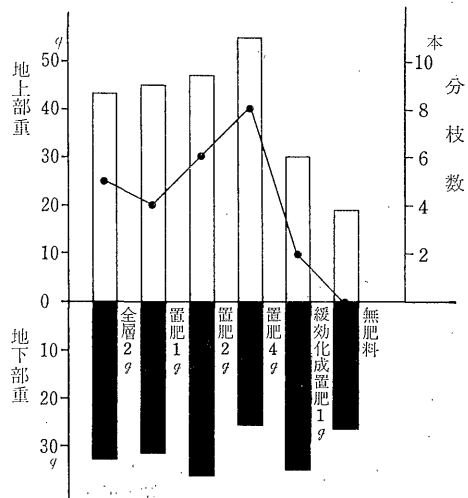
置肥として使用するには、2g/5号鉢が適当であると認められ、コーティング肥料の利用によって、追肥労力を大幅に節減でき、成品の揃いも良好であった。

第1図 リーガー・ペゴニアに対する追肥量と開花の関係



シンキリシマリンドウは、鉢物用に改良された矮性種で、濃紺の大きな筒状花が美しく、花期も長い。栽培も雨除け程度の施設で十分であり、技術的に比較的容易で、長期間にわたって出荷できるため、夏~秋の小鉢物として多く栽培されている。

図一2 シンキリシマリンドウにおける施肥量が100日後の生体重、分枝数に及ぼす影響



このリンドウに対するコーティング140タイプの効果は、図一2から生育盛期の100日後で、4gまでは施肥量の増加に伴い地上部重が増し、草丈、分枝数とも同傾

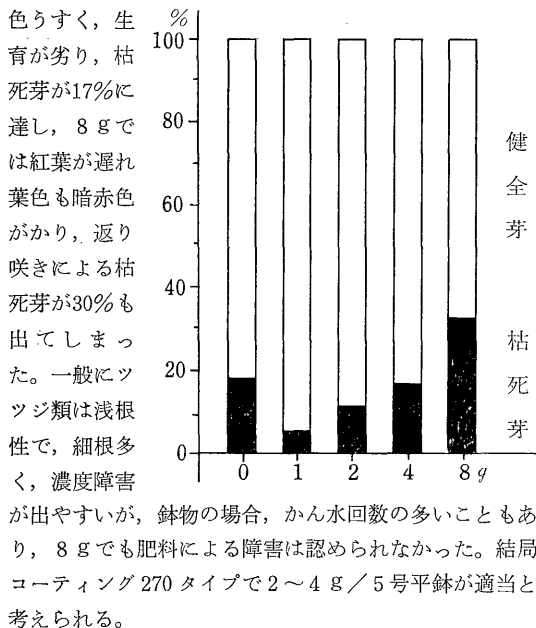
向であるが地下部重は大差なかった。対照として、今まで一般に使用されていた緩効性化成は、高温時の溶出が急で濃度障害が出やすく、後半の生育が極端に劣った。

コーティング140タイプの量的には、4gが生育旺盛であるが、根量がそれに伴わず、窒素過多となり、茎葉が軟弱で倒伏し、商品価値がなかった。生育状況、分枝数から考えて、置肥2g/4号鉢が適量と考えられる。

2. 花木類

ベニドウダンは、中山間地帯に自生する落葉ツツジで、春に美しい若芽と共に、真紅のスズラン状花房が垂下し、秋の紅葉も美しい花木である。低地で栽培すると施肥、温度条件によっては、秋の異常開花、頂芽の枯死が多くなり、商品価値に大きな影響を及ぼす。

図-3から 図-3 ベニドウダンに対する無肥料では葉色うすく、生育が劣り、枯死芽が17%に達し、8gでは紅葉が遅れ葉色も暗赤色になり、返り咲きによる枯死芽が30%も出てしまった。一般にツツジ類は浅根性で、細根多く、濃度障害が出やすいが、鉢物の場合、かん水回数が多いこともあり、8gでも肥料による障害は認められなかった。結局コーティング270タイプで2~4g/5号平鉢が適当と考えられる。

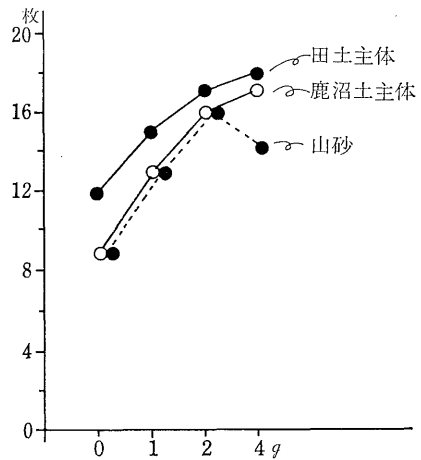


マンリョウは、ヤブコウジ科の低木で、万葉時代からすでに愛玩されている、日本古来の植物で、寒さに強く日影を好み、「万両」と縁起のよいこと、赤い実と緑葉の対比が、美しいことから、近年再び冬の鉢物として、多く用いられるようになった。

育苗時における生育は、次年度の分枝数に最も影響を及ぼすため、用土と施肥量の関係は、非常に重要である。マンリョウは、は種後3年目に分枝を出し、その先に次年度実をつけるため、2~3年の育苗時が栽培上大切であり、鉢物用としては、節間がつまり、分枝数を多く得るために、葉枚数の多少が品質に大きく影響する。

そこで、図-4のごとく、分枝数に最も関係する3年

図-4 マンリョウ苗に対する施肥量が用土の種類と葉数に及ぼす影響



目の葉枚数について、施肥量と用土の関係を見てみると2gまでは直線的に増加するが、それ以上になると増加傾向が鈍るか、用土によっては生育阻害を起こす場合もある。各用土のPHは施肥量の増加に伴って低下し、ECは上昇する傾向であった。そこで育苗時では、コーティング270タイプ2g/3号鉢程度が適量と考えられる。

使用上の注意事項

- ① コーティング肥料の溶出は、温度の影響を受け、高温時には短く、低温時には長めになるので、使用時期によって若干使用量を勘案すべきである。
- ② 窒素の肥効が良いので、花芽分化が、窒素の肥効に左右されやすい花物は、溶出タイプと施用時期を十分考慮すること。
- ③ 低温期の使用では、定植直後の速効性肥料の併用も考える必要がある。
- ④ アザレア等、細根で、肥やけを起こしやすい種類では、置肥の方が心配がない。
- ⑤ 置肥の場合は散水法をとり、かん水むらに十分注意すること。
- ⑥ 蒸気消毒前の肥料混入は、270タイプ以上では、利用できる面もあるが、消毒後を前提とする。
- ⑦ ベゴニア等では、ホウ素欠乏の懸念もあり、用土によっては、微量元素への注意を払う必要がある。

以上、思いつくまに注意点をあげてみたが、鉢物花きは種類が多く、それぞれ吸収量、吸収特性も異なるので、一律の使用基準をもうけるのは難しいが、当場では多くの種類について実用性を認めており、種類の特性を知り、使用量とタイプの組合せによる体系を確立してゆけば、施肥の省力化と安定、均質生産を十分可能にできるものと考えられる。